



Connect
Possibilities

～可能性を紡ぎまわす火種となる～



新ビジョンのタイトルは、誰よりも三原の良さを知っている私たちだからこそ、まちに散らばる可能性を紡ぎ、まちづくりの火種（きっかけ）となり、まちや市民の意識を変化させることによってまちづくりを加速させたいとの思いから「Connect Possibilities 可能性を紡ぎまちづくりの火種となる」とさせていただきました。

Connect Possibilitiesのフォントは、炎に照らされて出来た影のイメージしたフォントを使用し、コネクットの部分は7色使用し、まちに散らばる多くの可能性を表現しています。ポシビリティーズの「i」の部分でろうそくの炎に見立て、火種を表現しました。火種の影を人の形に描き、私たちが可能性を紡ぐという意味合いで線を交差させて表現しています。また、「可能性を紡ぎまちづくりの火種となる」の17文字はSDG'sの配色を使用しSDG's達成の推進を表しています。

目次

理事長挨拶 担当委員長挨拶
2

2020年度 組織構成図
3

Connect Possibilities
可能性を紡ぎまちづくりの火種となる
4-5

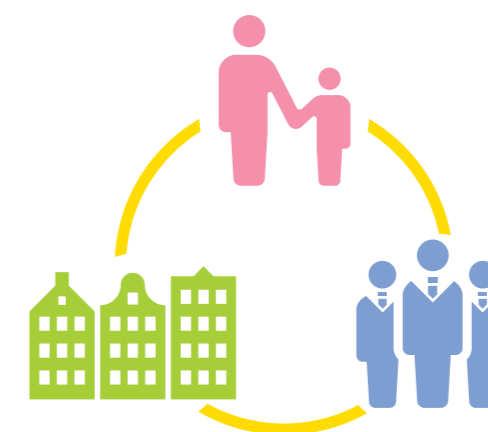
愛されるまち
6-7

愛されるひと
8-9

愛される私たち
10-11

ビジョンの運用
12

新入会員の考える5年後の三原JCのあるべき姿
13



理事長挨拶



理事長
勝村 晋

私たち一般社団法人 三原青年会議所は1962年設立以来「明るい豊かな社会の実現」を目指し、その時々の経済、社会、文化等に関する諸問題を 調査研究し、市民、行政あるいは各種団体との連携を通じ、地域社会の正しい発展を図るべく活動して参りました。その間、時代に先駆けたまちづくりの方向性を打ち出すべく、1973年「瀬戸のインターチェンジ三原」～ 歴史と未来の調和した福祉都市～構想、1985年「インターフェイスみはら 21C」～瀬戸、ロマン、国際色豊かな都市「三原」～構想、1992年「New Gravityみはら」～ドラマチックな出会い、広域交流都市～構想、2000年「コラボレーションシティ21」構想、2005年「三原の誇想 創力」構想、2014年には4つの行政区が合併し新三原市誕生から10年目を迎える節目に併せ、6つ目のビジョン「Direction Toward HAPPINESS 笑顔への道標」を発表しました。近年、私たちがおかれている環境は劇的に変化しています。少子高齢化や人口減少、IT技術の発展による更なる情報化時代、2018年7月には未曾有の豪雨により三原市も甚大な被害を受けました。また、本年は新型コロナウイルス感染症拡大防止により私たちの生活様式そのものの見直しが余儀なくされました。様々な社会情勢や自然環境の変化がある中で、責任世代と言われる私たちの活動の原点を見つめ直し、あるべき姿や進むべき方向性を明確にすることが必要だと考え、7つ目の新たなビジョン「Connect Possibilities 可能性を紡ぎまちづくりの火種となる」を発表いたします。本ビジョンは「愛されるまち」「愛されるひと」「愛されるわたしたち」の3つのジャンルに分類し、それぞれの現状、問題点、そして私たちが運動を展開していく行動指針を示しています。先人たちの教えを守り、新しい風を吹き込むことが我々の使命であり、責任であるとの認識を持ち、会員一丸となって「明るい豊かな社会の実現」を目指し邁進して参ります。今後とも一般社団法人 三原青年会議所に対しましてご支援、ご鞭撻を賜りますことをお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

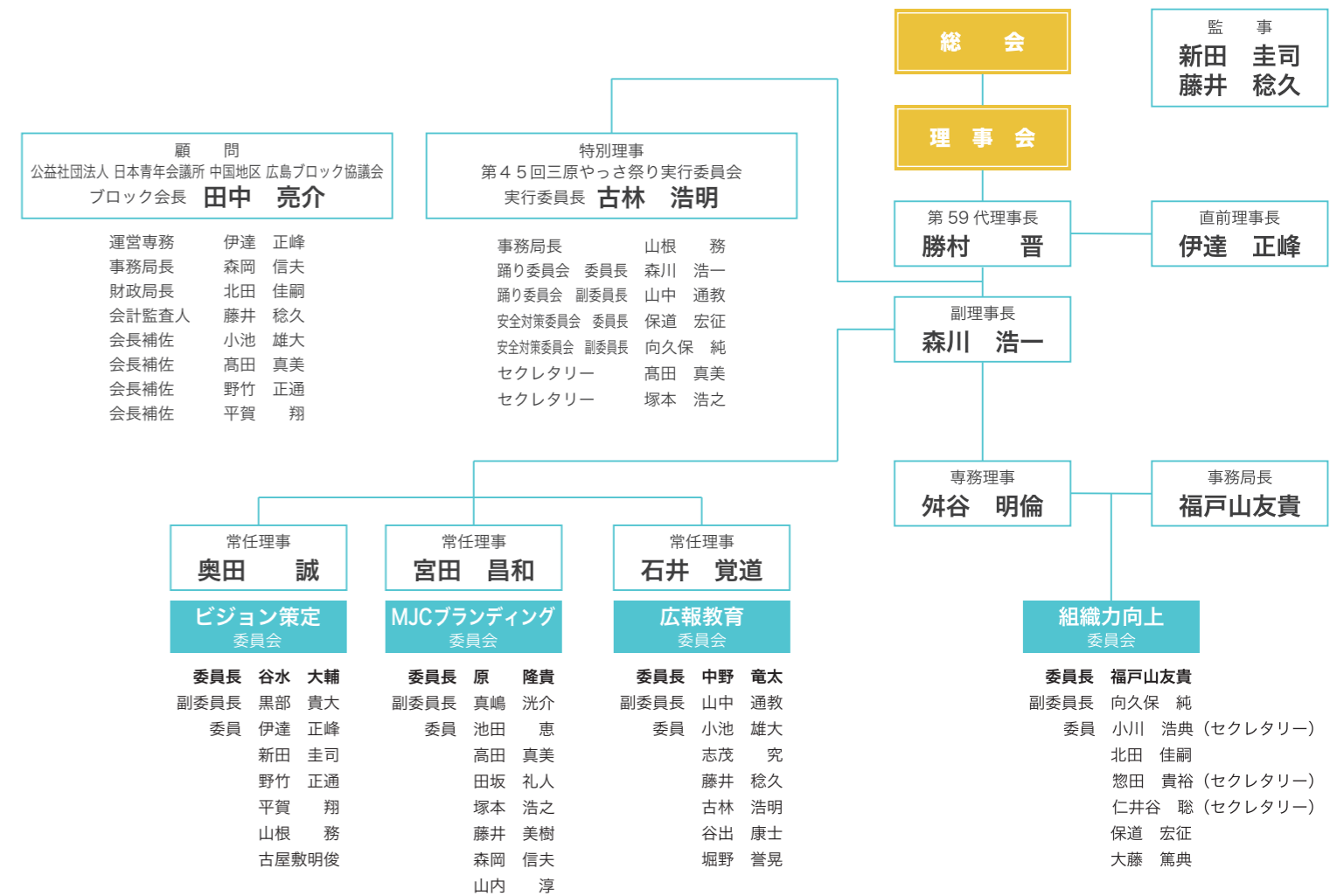
担当委員長挨拶



ビジョン策定委員会 委員長
谷水 大輔

私たちが2014年に策定したビジョン～Direction Toward HAPPINESS 笑顔への道標～は今年を達成期限としていました。私たちは6年間の活動を通じてビジョンで掲げた多くの課題に取り組んでまいりましたが、世情の変化とともに私たちが取り組むべき課題も次第に変化しました。そこで私たちは、時代の変化に対応した活動を継続して理念を実現するために1年をかけて新ビジョンの策定を行うことにしたのです。新ビジョンの策定にあたっては、まず、ビジョンとは“思い描く将来像”と“それを叶えるための構想”であると定義しました。次に、会員にもっとビジョンを活用してもらえるように3つの点を意識して策定するようにしました。1つ目は分かり易く会員に浸透しやすいこと、2つ目は会員全員でビジョンの意義・効果・役割を共有しながら策定すること、3つ目はビジョンの中にその活用法や検証方法も含めて策定することです。例会、意見交換会、座談会を実施して会員の意見を集約した結果、私たちの理念を実現できる新ビジョンができたと考えています。

2020年度 組織構成図



2020年度会員

Connect Possibilities

可能性を紡ぎまちづくりの火種となる

取り組むジャンル

取り組む項目

取り組みの目標

愛されるまち



魅力溢れるまちの宝の発掘・共有

会員ひとりひとりが"まちの宝"と"ひと"をつなぐ
"三原の魅力案内人"となる

助け合いの気持ちが溢れるまち

共助を育むため
"ひと"と"地域"をつなぐ

愛されるひと



活力溢れるまちづくりへの市民参画

"楽しい"と"まちづくり"をつなぐ
"まちづくりの案内人"となる

郷土愛溢れる子ども

"歴史・文化"と"子ども"をつなぐ

愛される私たち



気づきの溢れるJCの広報

"私たちの広報"と"市民"をつなぐ

希望溢れる同志の拡大

"楽しむ私たち"と"同志"をつなぐ

人間力溢れる活動

"私たち"と"成長"をつなぐ

愛されるまち



まちの魅力を考え、活気に溢れ笑顔で暮らせる環境を作ることで、
三原市内外問わず誰からも愛されるまちを目指す。

魅力溢れるまちの宝の発掘・共有

現状

三原市長期総合計画によると、三原市民の感じる三原の魅力は“祭り”“食”“歴史・文化”“瀬戸内海”等様々であるが、ズバ抜けて「三原といえばコレ!」と言えるほど知名度は高いものはない。三原訪問者が三原市を再訪したくない一番の理由は「魅力的な観光コンテンツが少ない」が最大の72.2%で最も多い。

問題点

三原の魅力については小早川隆景公にまつわる歴史的資源ややっさ祭り等の歴史や文化、タコ等の食文化、瀬戸の多島美等の景観、また陸・海・空揃った交通インフラ等、日常に埋もれやすいものが多く、素晴らしいということを知ってはいるが、さらに市民に三原の魅力を知ってもらい共有してもらう必要がある。

理想の状態

市民が三原の魅力を知っていて共有できている状態

会員一人ひとりが三原の魅力案内人になる

期待される効果：市民や訪問者と三原の魅力の共有を図る際に、
三原の魅力を120%伝えることのできる仕組みづくりを整える。

会員の考える具体的手法例

- ・タコに代わる三原の売りを本格的に打ち出す事業・三原の食を味わって貰う事業
- ・広島空港民営化への進言・三原の好きなどころ、だめなどころ、魅力ある部分など市民にアンケート実施
- ・観光強化、佐木島をサバゲーの聖地にする事業

助け合いの気持ち溢れるまち

現状

2015年の市民アンケートで“三原の住みやすさを感じる場所は”の回答で一番多かったのは“自然災害の心配が少ない”で約50%だった。しかし、2018年7月豪雨災害が発生し、わがまち三原も多大な被害を受けた。また2020年には新型コロナウイルス感染拡大に伴い、感染者数は三原市では2名だったものの広島県内では434名である。(2020年8月14日現在)経済では全国で436の企業が、広島県内では12の企業が倒産した。(2020年8月14日現在)自然災害、コロナに直面した今だからこそ助け合える地域コミュニティに着目する必要があるのではないか。

問題点

“自然災害の心配が少ない”に代わる“住みやすさを感じる場所”を新たに見つける必要がある。また有事の際には“自助”“公助”“共助”が重要になる。“自助”とは自分でできることを自分自身で行うこと。自らの命は自ら守ることということである。具体例としては防災グッズ、備蓄食料などの購入、避難所を確認する。帰宅方法の確認などがある。“公助”とは個人や地域の力では解決できないことについて、公的機関が解決することである。具体例としては、安全安心なまちづくり、基板整備、公共建築の耐震化、補助事業等がある。“共助”とは個人の力だけでは解決が困難なことを住民や事業所、ボランティアで自主防災組織を結成するなど地域で協力して行うことである。三原市には現在、自主防災組織が127ある。多いように感じるかもしれないが三原市の全世帯数を分母とすれば加入率は54.7%となっている。

理想の状態

助け合える地域コミュニティができ、
有事の際に不安を感じることなく暮らせる状態。

共助を育むため“ひと”と“地域”をつなぐ

期待される効果：有事の際の不安を“共助”によって軽減することができ
市民の安心につながる。

会員の考える具体的手法例

- ・災害体験を被災者にお話ししていただき、日頃から防災に対する備えを考えて貰う事業
- ・まちぐるみの防災に対する意識改革に対する事業
- ・コミュニティで行う防犯教室(SNS,メディアリテラシー)事業



愛されるひと



郷土愛を育み、まちづくりに対して当事者意識の高い市民を増やすことで、三原市民が魅力的で愛される人になることを目指す。

郷土愛溢れる子ども

現状

三原やっさ祭りはわがまち固有の財産である。この財産を守っていくためには、まちの担い手である子どもたちに継承していかなくてはならない。そのためにも、子どもやっさへの出場の推進は重要であると考え、これまでも推進活動を行ってきた。しかしながらここ10年間の参加小学校は5～9校に留まっている。また、わがまちには小早川隆景公にまつわる歴史を中心に多くの歴史的資源がある。例えば小早川隆景公の墓所がある米山寺、2017年に続日本100名城に選定された新高山城。ほかにも新城の大手門を移築したと伝えられる宗光寺山門などがある。しかし、学校教育以外では、それらに触れる機会が少ないのが現状である。まちを発展させるためには子どもに郷土愛を持ってもらう必要がある。

問題点

子どもやっさへの出場が増加しない原因は多岐にわたると感じるが、例えば子どもたちやPTA、学校長などにやっさ踊りの楽しさや重要性を継続して伝えきれていないことも原因の一つかも知れない。子どもたちがやっさ踊りの楽しさや重要性を理解し親や学校にやっさ祭りに参加したいと言えば協力体制も変化するかも知れない。そのためには私たち自身がまずやっさ踊りを踊れるようになって楽しさを伝えることも重要であると考え。また子どもやPTAや学校長等にやっさ踊りの楽しさや重要性を伝える事に加えて、子どもに体験型でやっさの楽しさを伝えるような取り組みや、次世代を担う子どもたちに三原についてより深く学ぶ機会を提供する為、歴史・文化継承の体験型事業の継続実施が必要であると考え。

理想の状態

次世代を担う子どもたちに郷土愛が溢れている状態

“歴史・文化”と“子ども”をつなぐ

期待される効果：子どもたちがこのまちの歴史・文化に興味を持ち郷土愛が育まれる。

会員の考える具体的手法例

- ・やっさ祭りへの全小学校参加の推進・やっさ祭りを通じて教育や各種事業を展開
- ・三原の歴史・文化の継続事業(ワクワク系)の確立・学校訪問授業

活力溢れるまちづくりへの市民参画

現状

三原市長期総合計画によると市民アンケートでは、まちづくりの推進が必要だと思う市民は77.1%。また、「まちづくりに何が大切か」との設問には「市民活動に関する情報」が45.5%となっていることから市民とまちづくりのマッチングが十分ではないと考える。また2020年8月9日執行三原市長選挙投票率46.01%であった。

問題点

「まちづくり」は「なんだか難しそう」「具体的に何をしたらいいの」「現状に困っていない」などの理由から積極的にまちづくりに参画出来ない市民がいる。選挙については投票率の結果からみても市政に関心が無く受け身の市民が多いと考える。2020年8月9日執行三原市長選挙で三原戦後最低の投票率となった今だからこそ候補者の政策を知り、政策本位の投票が行える仕組みが必要なのではないか。

理想の状態

市民にまちづくりの情報が周知され、まちづくりの楽しさを感じ、積極的にまちづくりに参画している状態。

“楽しい”と“まちづくり”をつなぐ“まちづくりの案内人”となる

期待される効果：“まちづくり”に対して何かしたいけどもう一步踏み出せない人の背中を押す。また全く興味がない人に対しては周囲の人が楽しそうに“まちづくり”をしている人に触発されて興味が湧くようになり“まちづくり”に対する意識の底上げになる。

会員の考える具体的手法例

- ・人口減少シミュレーション大会の実施・県大生とのコラボイベントの実施
- ・市議会議員の立候補者の公開討論会・マニフェスト発表会の実施
- ・チャレンジユニバーシティ事業



愛される私たち



我々、三原青年会議所会員がまちづくりの先頭を走り活動するため
地域から頼られ、愛される団体を目指す。

気づきの溢れるJCの広報

現状

私たちの活動に賛同していただき市民意識を向上させることが広報の役割であると考え、
ホームページ、SNS、広報誌、メディアを使って広報を行ってきた。また、市民に対してアンケートを行い
広報の検証も行ってきた。

問題点

広報に関して市民アンケートをほぼ毎年実施し次年度以降の広報活動に引き継いでいるが、FaceBo
okのフォロワー数は約500人で私たちの活動に対してもっと関心を持ってもらう必要があると考える。広
報担当委員会の事業計画で背景、目的が変われば伝えたい内容も変わり三原青年会議所のファンが定
着しづらいと感じる。

理想の状態

市民が広報を通じて私たちの活動に賛同し、
三原青年会議所のファンになってもらう。

“私たちの広報”と“市民”をつなぐ

期待される効果：私たちの広報に興味を持ってもらえる市民が増える。

会員の考える具体的手法例

- ・SNSを活用して事業後に市民からのレスポンスを集約・三原の魅力を発信できる映画(動画)を作成
- ・やさもっさチャンネルの視聴率化の推進・公開例会を年に1回以上実施

希望溢れる同志の拡大

現状

私たちは「明るい豊かな社会の実現」のために志を同じくする仲間を増やしより活動を活性化させたい
と考え会員拡大を行ってきた。しかしながら会員数は減少傾向にある。また卒業までの所属年数も低下
している。私たちの活動を維持、拡大の為に会員数の増大と若年会員の獲得は急務であると考え。

問題点

前ビジョンでも会員拡大を掲げ2020年までに会員数87名を達成すると目標を掲げていたが、現状
は目標には程遠い状態である。経済面(年会費)の問題や入会期間の問題もあるが、まずは私たちが何
を目的に活動しているかを分かり易く伝える(ビジョンを活用)必要がある。また、事業もオブザーバーとし
ていつでも参加できるようにし“楽しさ”も伝える必要があると考える。

理想の状態

「明るい豊かな社会」実現のために私たちが必要と考える
事業を会員数の問題で制約されることなく行える状態。

“楽しむ私たち”と“同志”をつなぐ

期待される効果：私たちの活動がより理解され私たちの活動に触れる機会が増え
賛同を得られる。

会員の考える具体的手法例

- ・拡大室の設立・定款の変更・賛助会員を設ける・会費の変更・異業種交流会を年2回実施
- ・みのりカップのように持ち回りで拡大のための異業種交流会の実施

人間力溢れる活動

現状

現在三原市には多くのNPO法人・ボランティア団体等が存在し、三原をより良くするために様々な活動を
行っている。その中で私たちが地域・社会に必要とされる団体であり続けるためには私たちが規則、気質
(まちの課題を見出し、課題に対して効果的に取り組み、検証をする)を大切にしつつ、時代に即した活動
をしなくてはならない。

問題点

例会は会員の権利である。青年経済人として規律順守を徹底し、自己研鑽の機会を最大限に活用する
必要がある。また例会出席の意義、規律順守の必要性を改めて会員に伝えるとともに例会に出席したく
なるような工夫を考える必要が対外交流についてはある。拡大目的以外の異業種交流や他団体との交流
の機会が少ない。

理想の状態

会員全員が青年経済人として見本となり
頼られる存在になる。

“私たち”と“成長”をつなぐ

期待される効果：与えられた機会を規律を遵守し最大限に活用することで
自己成長につながる

会員の考える具体的手法例

- ・有事に対応できる三原青年会議所規則の変更 ・継続可能な団体運営
- ・サテライト会議等の試験運用 ・時代に即したルールの確立

ビジョンの運用

1、事業計画書にビジョンのどの項目に対する事業かを記載し、事業報告書でビジョンに対しての効果を記載する。

- 事業の目的がより明確になる。ビジョンの進捗状況を確認することができる。

2、会員手帳にビジョンを明記する。

- 会員にビジョンが浸透する。

3、委員会資料にもビジョンを添付し事業構築の参考とする。

- ビジョンを意識した事業構築ができる。

4、新入会員に対して仮入会員セミナー等でビジョンの意義・効果・役割を伝える。

- JC活動のイメージがしやすくなる。

5、毎年事業検証を行い、3年目には中間検証を行う。

- ビジョンのゴールに対して現在地を知る事ができる。また時代に即した活動ができる。

6、ビジョンの唱和を実施する。

- ビジョンを唱和することでビジョンを意識して例会に臨むことができる。



新入会員の考える5年後の三原JCのあるべき姿

当ビジョンは「会員全員で策定する」ことを重視しています。

したがって新入会員の「5年後にどういう団体でありたいか」を考えて貰いました。

今年の新たな仲間の熱い思いを記載しています。

大藤 篤典君

- 20代の青年会議所メンバーがいる団体

20代の会員を1年に1人増やせば、各委員会メンバーに20代メンバーが入る事ができます。

なぜ、20代が必要かは各年代の意見を聞きたいからです。前職の会社での経験ですが、同年代の意見はやはり似ていることがありました。20代の社員が考えた事や行動を見ると自分には無い事を突然やるが多かったです。その刺激を受けることにより自分も成長すると思いますし新鮮な気持ちにもなります。直近の話であります。新型コロナウイルスが発生した際も、北海道知事や大阪府知事といった若いトップの考えはみんながびっくりする考えを突然やるが多かった記憶があります。現在の青年会議所メンバーは全員が30代の方々と伺いました。その中でも経験の差はあると思いますが、30代前半と後半の意見で考え方も違いはあります。その中へ20代の意見が増えればいろんな角度から考えが膨れると思いますので今以上に盛り上がる団体になると思い選定しました。

谷出 康士君

- 三原の皆さんに頼りにされる、何かある時には相談されるような団体

雑用係としてとりあえず声をかけられるというわけではなく、一緒にいいものを創っていくためにアイデアを求められたり協働できたら良いと思い選定しました。

- 公平・中立な立場での活動ができ続けている団体

この度の選挙関連活動でのキーワードだったかと思いますが、公平・中立な立場というのは常に大事で、自他ともにこれが発揮でき認められるような団体であることが、持続可能性にも繋がっていくように思い選定しました。

- 会員ひとりひとりが豊かでゆとりのある団体

自己成長のためにはある程度のストレス負荷は必要とは思いますが、それ以上に、経済的にも心理的にもその他多くの要因においても、各会員が「豊かであること」「ゆとりがあること」は重要と思い選定しました。

古屋敷 明俊君

- 三原市民に認知される団体

今の現在、三原青年会議所の活動内容を知っている三原市民の方は少ないと思われます。

実際私の周りでも名前は知っているけど実際何をしている団体なのか知らないという話はよく聞きます。私の主観になりますが特に20代30代の方は三原に関心薄い様に感じます。三原に関心を持ってもらうためにも、三原青年会議所の活動内容を知ってもらう必要があると感じ選定しました。

堀野 誉晃君

- 三原市民に認知され、なくてはならないと思ってもらえる団体

- 三原市の青年が入会したいが、倍率が高くて入れない団体

- 三原市の伝統を守りつつ、変革を起こしていく三原企業の星となる団体

- 企業における組織づくりを学べる団体

今の課題に分かりやすく取り組み、未来に種まきをする必要があると考え選定しました。

※未来に種まきとは「市場」とのつながりを持ち、経済を回すイメージです

山内 淳君

- 5年後に三原を盛り上げていくのに欠かせない団体

- 企業における組織づくりを学べる団体

前市長の金銭問題、新型コロナウイルスの拡大、それにより様々なイベントの中止などで、まちのイメージが悪く、活気がないように思います。こんな時代だからこそ三原青年会議所が率先してまちを盛り上げていき、市民の皆さんに三原に欠かせない存在だと思われる団体にと思い選定しました。

